

---

# 悟空 切ナイ恋物語

悲劇のM

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

悟空 切ナイ恋物語

### 【Nコード】

N8582F

### 【作者名】

悲劇のM

### 【あらすじ】

お気づきの方もいるかと思いますが、恋空の二次創作です。美嘉Ⅱベジータ、ヒロⅡ悟空、ノゾムⅡクリリン、アヤⅡナツパです。恋空で泣いちゃうような乙女は読まない方がいいかも。

## 第一話

ベジータⅡ甘い物が好きな乙女

カカロットⅡベジータが恋してるイケメン男の子。心臓病に掛かっている

フリーザⅡ恋敵。族のリーダーでベジータをレイプするよう下っ端に指示する

クリリンⅡカカロットの友達

もしもあの日君に出会っていなければ

こんなに苦しくて

こんなに悲しくて

こんなに切なくて

こんなに涙が溢れるような想いはしなかったと思う。

けれど君に出会っていなければ

こんなに嬉しくて

こんなに優しくて

こんなに愛しくて

こんなに温かくて

こんなに幸せ気持ちを知ることできなかったよ…。

涙こらえて私は今日も空を見上げる。

空を見上げる。

## 第二話

「あゝ！！超気減ったしっ  
」

待ちに待った敵前休憩。

ベジータはいつものように  
机の上でお弁当を開く。

戦闘は面倒。

だけど同じ部隊で仲良くなったナツパとトランクスと一緒に  
お弁当を食べるのが唯一の楽しみなのだ。

田原ベジータ

今年の4月、部隊に入隊したばかりのサイヤ人一年生。

入隊してからまだ  
三ヶ月足らず。

仲良しで気の合う友達も出来て結構楽しく過ごしていた。

チビだし  
バカだし

特別かわいってわけでもないし  
特技なんてないし  
将来の夢なんてあるわけもない。

部隊に入ってすぐに染めた明るい茶色のストレート髪。  
ほんのりと淡いサイヤ人スーツがまだあまり馴染んでいない今日こ  
の頃。

訓練時代から平凡な生活を送ってきた。

普通に友達もいた。  
普通に実戦もした。

倒した人数は三人。  
多いのか少ないかなんてわからない。

だけど共通してるのは  
どれも短期間で終わりを告げているということ。

本当の戦闘なんて知らない

知ってるのは遊びの戦闘  
ただ一つだけ。

戦闘なんて  
しなくてもいい！

そんな中…

君に出会った。

このまま平凡に終わるはずだったベジータの人生は、君に出会ったことによって変わっていく…。

### 第三話

いつものように

ベジータとナツパとトランクスの三人は  
もくもくとお弁当を食べていた。

食事の時って無言になるのはなぜだろう。

その時、土を踏む足音がした。

それと同時にポケットに手を入れた一人の男が三人のもとへと  
近づいて来た。

7

その男は三人の前に立ち止まり、  
軽い口調で話し始める。

「こんにちは！俺の名前はクリリン。隣のクラスなんだけど知っ  
てる？」

目を合わせる三人

しかしそのまま知らんぷりをして  
お弁当を食べ続ける。

高校に入学してからクリリンの噂をたくさん聞いた。

女ったらし。

手が早い。

遊び人。

クリリンは毎日のように違う女を連れて  
校内を歩いている。

“クリリンに気をつけろ！”

“クリリンに狙われた女は逃げられない”

そんな話を聞いたこともあつたっけ…。

高めの身長に

整った顔。

メッシュが入って

ワックスで無造作にセットされている髪。

頭髮なんて一本も生えてないのに。

何かを見透かすようにじっとみつめる瞳。

モテる要素を持っているのは確かだ。

問題は性格。

この軽い性格はどうにかならないのか…。

そこまで悪い噂を聞いていながら関わるつもりなどもちろんない。

## 第四話

三人はクリリンの存在に気付かないフリをしながら、弁当を食べ続ける。

「あれゝ無視かよ？俺と友達になろうぜ！番号交換しよう！」

あまりのしつこさに喉が渇き、  
イライラしながら近くにある麦茶を手に取りごくんと一口飲み込むベジータ。

「うーむ、どうするか……。まあ、問題無いだろう。交換するか」

沈黙の中、  
突然言葉を発したのはナツパだ。

ベジータとトランクスはギョツとした顔で目を合わせた。

ナツパが笑顔でクリリンと  
番号交換をしている。  
信じ難い光景…。

クリリンが満足げに教室から出て行くのを確認し、  
ナツパに問いただした。

「おいナツパ、何であんな軽そうな奴に番号を教えるんだ！？痛い  
目を見ないとわからないのか貴様?!」

そんなベジータの心配をよそにあっさりと答えるナツパ。

「俺、イケメンに目が無いんだよ！ウフッ」

ナツパは大人っぽくて綺麗な女の子。  
スタイルがよくクリリンと同様のスキンヘッドのつんつる頭が特徴

男運が悪く付き合う男は軽い感じの男ばかり…。

だから彼氏が出来ても、付き合ってすぐ別れての繰り返し。

「だめだぞナツパ、あんな男に本気になったりしては。」

真面目な顔で心配するトランクスに対し  
ナツパは軽い返事をした。

「大丈夫だろ。」



## 第五話

戦闘が終わり、  
家に帰って部屋でごろごろしながらトレーニングをしていた。

その時…

ブルルルルル

部屋に鳴り響く着信音。

しかも登録してない  
知らない番号から…。

誰だろう???

相手を探るよう出る。

『誰だ貴様…??』

『…』

…無言。

『おい！聞ってるのか??.』

少し強気で言ってみる。

ガチャッ  
プープープー

切られてしまった。

いたずら電話？  
間違い電話かな。

プルルルル

再び鳴り響く着信音。  
さっきと同じ番号だ。

どうせまた無言だと思い  
どうでもいいような声で電話に出た。

『何だ!』

『…し? もしもーし…』

電話の向こうから微かに聞こえる  
聞き慣れない男の声。

『だ、誰だ??』

電話の向こうの相手は  
鼓膜が破れてしまつくらいの大声で答えた。

『…ベジータ？悪いなあ電波悪くて！クリリンだけど、わかる？今日の昼休み話かけた奴だよ！』

ゲッツ！クリリン？

クリリンってあの女ったらしのクリリン？

今日ナツパと連絡先交換してた…あのクリリンさん？

頭の中はパニック状態。

返す言葉が

見つからない。

いっそのこと電話を  
切ってしまうか…。

## 第六話

電話を切ってしまおうとボタンに指を近づけた時  
クリリンは再び話し始めた。

『突然電話したら驚くよなり、ごめんごめん。ナツパから番号教えてもらった。友達になってくれよ!』

なるほど。

ナツパが勝手に教えたんだ。…って納得してる場合じゃなくて!!

明日ナツパへの軽い復讐を決意しながら  
冷静を装って答えた。

『…で何の用だ??』

『だからー、俺と友達になってよ! なっ? 頼むよー』

軽い…軽すぎる。

軽い男は苦手。

『…仕方ないな…』

仕方なく友達になることを承諾して  
電話を切った

そうしないと電話を切ってくれないような気がしたから。

クリリンの番号を登録…  
一応しておくか。

ジリリルリ

不快な目覚ましの音で目が覚め、  
今日もまたいつも通り部隊へ向かう。

玄関で上靴に履き変えていた時  
ナツパの姿を見つけた。

興奮気味に  
ナツパのもとへ駆け寄る。

「おいナツパ！！勝手に番号教えるなと何度言えばわかるんだ！昨日クリリンから電話が来たんだぞ！！」

「悪いな だってクリリンの奴がベジータの番号教えるってうるさいかったんだ。なんかおごるから許してくれ」

何事もなかったようなナツパの横顔を見つめながら  
深くため息をついた。

## 第七話

じめじめしたある日の午後…

訓練時代からの親友であるピッコロとベジータの家で遊んでいた。

休みに入って毎日のように遊んでいる。

ピッコロはどんな悩みでも相談出来る大切な友達。

訓練時代の時はよく二人で悪いことをしたりもした…

いわゆる“悪友”であつたりもする。

この日もくだらない話をしながら盛り上がっていたその時…

ブルルルル

部屋に鳴り響く着信音で二人の会話が途切れた。

「すまんピッコロ、悪いが電話に出るぞ」

「構わん」

画面を見ると、

知らない番号からだ。

しかもPHSからではなく家の電話から…。

「出ないのか?!」

不思議そうな顔をしながら覗き込むピッコロ。

「…やめておこう。知らない番号にみすみす出る俺じゃない!」

そう答えて電話を切ろうとしたその時、

ピッコロはベジータの手からPHSを奪い電話に出た。

『もしもし？私はベジータの友人だ。ベジータ？今かわる』

「高校の友達だそうだ。変な人じゃなかったぞ！」

ピッコロは受話器をおさえながら小さな声でそつ囁き電話を手渡してきた。

## 第八話

仕方ない。

ここは電話に出るしかない。

『…もしもし』

『もしもし俺！クリリンだ　ベジータ、俺のこと避けるしなー、ひでいぞ！俺泣きそうだぜ』

ゲッツ！！

このウザいくらいのテンションの高れ…。  
クリリンだ。

『何だ??』

冷たく言い放つ。

『またまたあゝベジータは冷たいなあ！俺何かしたか？してないだろ！ハハハハ』

酔っているのか  
クリリンの口は止まらない。

『俺PHS止められちゃってさ、参った！今、悟空って奴の家から電話かけてるんだ！頭良いだろ？今からそいつに変わるぞ！』

『なっ…ちょっと待てっ…』

最後まで言い終わらないうちに、  
電話の相手が出た。

『もしもし？』

『えっ……もしもし』

ついつい答えてしまう。

『オッス、オラ悟空。わりいわりい、あいつ今かなり酔ってるみたいで』

クリリンとは正反對の、  
低く落ち着いた声。

『問題無いが…悟空君だったな??家の電話からかけてて大丈夫なのか??』

ベジータの問いに悟空は電話越しで笑って答えた。

『カカロットでいいから!番号聞いていいか?俺からかけ直すからよ』

そして番号を交換した。これがカカロットとの出会いだ

## 第九話

孫悟空…

いや、カカロットと番号交換をしたあの日から  
毎日連絡を取り合った。

カカロットとは会ったことがないけど話が合う。

電話をして  
わかった事。

クラスは遠いけど同じ高校に通っていて、  
一度クリリンと教室まで来たことがあり、  
ベジータと話してみたいと思っていていたらしい。

二人は暇さえあれば電話やメールをしていた。

休みも終わり、  
眠い目をこすりながら部隊へ向かう。

教室に着いた時機の上に置かれていたのは  
一通の手紙。

【D E A R ベジータ F R O M ナツパ】

…ナツパからだ。

クリリンと連絡をとり始めてから  
ナツパに避けられている。

不安な面持ちで  
手紙を開く。

【話があるから、手紙読んだら武器備蓄室まで来てね！】

手紙を握りしめたまま教室を飛び出した。

備蓄室のドアの前で  
軽く深呼吸をする。

……怒ってるかな。

嫌な思いが  
頭を過ぎる。

そっとドアを開けると  
窓側の机に座っていたナツパが振り向いた。

「よう」

いつものナツパに  
少し戸惑う。

「お、おう……」

「すまん、急な呼び出しで！」

「ん……」

「ベジータは、今恋してるか？」

## 第十話

一瞬浮かんだのは  
カカロットの顔。

会ったことがない…  
勝手に想像している  
カカロットの顔。

「…バカが、いるわけないだろ」

ベジータの返事を聞き、  
すかさず口を開くナツパ。

「俺は、今恋してるぞ!」

…相手はきつとあの人。

「まさか、クリリンか?」

「ああ!本気なんだぞ。それで、お前はクリリンのことどう思っ

いるんだ？」

心配そうな顔をするナツパに対し、正直な気持ちを口にした。

「…ただの戦友だ。恋愛感情は少しもない！！」

ナツパの表情が少し緩む。

ナツパは席から立ち上がり  
背を向けた。

「俺、ベジータに嫉妬してたんだ。クリリンはベジータ狙っていたように見えたし、ベジータも好きなのか…と思っていたんだ。疑ってすまない。トランク스에話したらとても怒られたぞ！」

「そうか……」

「すまんなベジータ。許してくれ？」

しみりとした空気の中

ナツパが振り向いて

頭を下げる。

答えは一つ。

「……………もちろんだ!!」

夏休み中にカカロットという名前の男と知り合い  
毎日連絡を取り合っているということをナツパに話すと

ナツパは嬉しそうにベジータの腕に自分の腕を回した。

「そうだったのか。カカロットとは、どんな人なのだろうな……。  
ベジータ、お互い頑張るぞ」

## 第十一話

一時間目の戦闘は  
遠方戦闘だ。

ずっと心配していたトランク스에 仲直りしたことを報告し三人は戦  
場へ向かった。

歩いていると、  
前からはヤンキーとギャル男集団が…。

その中にクリリンがいる。  
確かにクリリンは  
ギャル男系だ。

「クリリン」ヌンッ

クリリンのほうに  
駆けて行くナツパ。

取り残された美嘉とトランク스는廊下の隅でナツパが戻って来るの  
を待つ。

その時集団のうちの一人が二人に近付いて来た。

明るい黒髪

整った細い眉毛

『亀』と書かれたオレンジ色の服

背が高い…おそらく180くらいはあるだろう。

その集団の中では、

あきらかにリーダー的存在

その男が鋭い目付きでを睨みながら

こっち向かってくる。

ベジータとナツパは視線をそらし逃げる態勢をとった。

二人の前に立ちはだかったその男は口を開いた。

「おっす、オラ悟空！お前確か、ベジータだよな？」

…悟空？カカロット？？

ギエエエ！！

夏休み中ずっと連絡とってたカカロット？

低くて落ち着いた声。

想像してたカカロットは、  
爽やかで大人っぽくて…

「よろしくな！」

カカロットは見た目から想像できないような子供みたいにあどけない笑顔で  
右手を差し出した。

## 第十二話

引きつった作り笑顔でじんわり汗ばんだ右手を差し出し、  
カカロットの右手を軽く握るベジータ。

隣では彼氏いない歴16年の純情なトランクスが、  
薄紫の髪をプルプルと震わせながら今にも失神しそうな顔をしている。

ベジータでさえ怖いのに、  
トランクスには刺激が  
強すぎたか…。

パンッ

運よく鳴った戦闘開始を告げる空砲。

握手した手をパッと離し  
放心状態のトランクスとクリリンと楽しそうに会話するナツパを強  
引に引っ張り、  
戦場へ向かった。

心がついて行かない。  
カカロット、想像と全然違うし…。

頭をかかえていると  
ナツパが教官を気にしながら耳元で呟いた。

「まさか、さつき握手してた人がカカロットなのか?! 超顔良ではないか! 幸運だなベジータ 俺はクリリン狙いだから安心しろ」

顔良だったつけ。  
顔見る余裕なかった…

そのまま顔を伏せているベジータにナツパは続ける。

「お互い頑張ろう! サイヤ生活で顔良 get するぞ」

「…まだ好きとかではない。今日会ったばかりなんだ!」

「これからどうなるかわかんないぞ」

この時は、

カカロットに恋するなんて全然思ってもいなかったんだ…。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8582f/>

---

悟空 切ナイ恋物語

2010年10月10日09時20分発行